無聊吟社句集

鹽野奇零

春の水山なき里へ流れけり　絲薩
春の日やくれてまた行く一里半　同
電線の一と筋ながき枯野かな　秀女
蕪汁や托鉢僧の物語り　同
炭小屋の屋根崩れけり冬の雨　古松
梅活けて机直しぬ俳諧師　同
春の日や物賣る人の長咄し　ちよ女
春の野や羊の群のこゝかしこ　同
めづらしき人も集まるかるたかな　同
凧や夕日淋しき小松原　同
旅に寢て貰けものなり初蛙　雪舟
水に浮ぶ花に飛びつく蛙かな　同
畑打や東風まだ寒き頬冠　同
若草に牛を放ちて書見かな　樂水
若草に鶴の子遊ぶ御苑かな　同
山根這ふ煙の深し短子の聲　同
永き日や草に飽きたる豚の聲　天涯
師の坊の鬚剃り玉ふ日永かな　同
放吟の詩歌も日永き寄宿かな　同
春の日や鯉釣る人と語りけり　一里水
紙を漉く十戸の村や桃の花　同
蝶舞ふや采女乘せたる渡舟　同
燒芋を一家五人の爐邊かな　白醉樓
東路を三里上りて春の雨　同
陽炎やところ〴〵に白き雲　同
陽炎や足場かけたる寺の屋根　同
此處こゝりは皇族下馬の柳かな　同
轉や御苑の春の深ふして　同
摘草や桃咲く家の遠くして　同
三尺を倉と垣根や猫の戀　奇零
蛇穴を出たり堤へ上る道　同
水やせて梅の花散る小門かな　同
顏を打つ雨に戻り春寒き　同
足元に雉子飛立ちて麥畑　同
永き日や坂にかゝりし牛車　同
梅咲や江東の宿に客增して　同
納豆賣風邪聲たてゝ町はづれ　同
春風や帶〆かへる丘の芝　同
二月や雨そぼふりて腰の冷え　同
加茂川に白き布干す春日かな　同
春寒し雨細くして我が心　同
海棠や雨に紙燭の影淡き　同
道問し旅の女や夕がすみ　同
草莆や關八州の雪とけて　同
小夜更けて馬子の通るや啼く蛙　同
菜の花や電車の通る畑つゞき　同